

## 6. 木製品・漆器

### (1) 供膳具

#### ① 漆器

漆は、仙台藩の重要な産品の一つであり、国産統制政策の対象品目であった。漆は単に器物や武器・武具に使われるだけでなく、建築資材としても重要である。実際、大崎八幡神社〔慶長12年（1607年）造営〕や瑞鳳殿〔寛永14年（1637年）造営〕といった、仙台藩を代表する近世初期の建造物には多量の漆が用いられている。そのため近世初期には、漆の植え付けが盛んに奨励されており、関連する文書も多く残されている（註1）。また、仙台藩には、扶持を給付された「御塗師」と呼ばれる職人が21名いて、主に武器・文具の製造にあたっていたとされる（山田揆一1917）。漆の他国への移出制限は、初期のものほど厳しく、寛永13年（1636年）の規定（註2）では、漆を原料に作られる蠟・蠟燭とともに、完全に「御とまり物」であったが、寛文9年（1669年）の規定（註3）では、「御境目他領へ不被相出物」であるが、「御割奉行書付」があればとの条件付きで他国への移出が一部認められた。しかしこのような保護・管理政策にもかかわらず、江戸後期には漆の栽培は低調となり、『封内土産考』（里見藤右衛門1798）の編まれた寛政期には既に自給不可能で、最上・米沢等から不足分を輸入する状態にあったようである。

仙台城二の丸跡からは、第5地点と第9地点の調査で、時代の異なるまとまった量の漆器が出土しており、これを基軸に、周辺の近世遺跡出土資料を補うことで、仙台藩領内での漆器の変遷を追うことが可能である（図114）。補足資料として用いたのは、下草古城跡（須田良平1993、須田ほか1994、天野順陽1995・1996）、仙台城三の丸跡6号土坑（仙台市教育委員会1985）、泉崎浦遺跡25号墓（吉岡・篠原1989）、八沢要害遺跡C平場1号井戸（小井川和夫1980）、佐沼城跡SK13（佐久間・小村田1995）、切込窯跡貯水池（佐藤広史ほか1990）、富沢遺跡88次調査第1土坑（太田昭夫1995）出土の漆器であり、それらについては次のような根拠で年代を推定できる。なお、仙台城出土の漆器の年代については、陶磁器を共伴しており、詳細は陶磁器の項を参照されたい。

宮城県黒川郡大和町鶴巣に位置する下草古城跡は、伊達政宗の三男、伊達宗清が、慶長15年（1610年）に宮城郡松森村から移り、吉岡に去る元和二年（1616年）まで居住したことで知られる。宮城県教育委員会の行った調査の結果、16世紀末にまで遡りうる町並み遺構が検出され、宗清の居住以前に、天正年間の文献記録に登場する「下草城」・「下草館」が存在していた可能性が指摘されている。漆器は、井戸跡（SE205, 206, 223, 311, 315, 322, 327, 353, 609, 611, 719914）、溝跡（SD360, 361, 608）、土坑（SK354）から出土している。下草古城跡からは18世紀以降の遺物も出土しているが、これらの漆器に関しては、出土遺構や共伴した陶磁

器からみて、全て16世紀末から17世紀初頭の年代を与えることができる。

仙台市太白区泉崎に位置する泉崎浦遺跡では、31基の近世墓が検出されており、その内の25号墓（桶棺）からは漆器が2点出土している。共伴遺物には、箸1膳、雁首1点、提灯底板2点、不明竹製品2点と6枚の錢貨がある。25号墓出土の六道錢は全て古寛永であり新寛永を含まない。本墓壙を切って構築されている22号墓（箱棺）には享保11年（1726年）初鋳のマ頭通不旧手の新寛永が、同じく18号墓には天保4年（1838年）初鋳の背「千」新寛永が含まれている。また、本墓壙を切って構築されている11号墓（箱棺）からは、18世紀代の大堀相馬の灰釉丸碗が出土している。以上の点から考えて、25号墓の漆椀の年代は、17世紀後半頃に置くことができよう。

宮城県栗原郡築館町に位置する八沢要害遺跡では、C平場の1号井戸跡から2点の漆椀が出土している。井戸の年代は不明であるが、近くの平場の建物跡に伴う陶磁器の多くは18世紀後半以降のもので、特に19世紀代のものが主体的である。漆椀の型式学的特徴も考慮して、19世紀代の年代を与えた。

宮城県登米郡迫町に位置する佐沼城跡では、三の丸地区の25～30石取りの上位家臣屋敷が発掘調査されている。漆器の出土したSK13は、底面近くに灰層を含む互層状の水性堆積層や動植物遺存体が層状に堆積しており、生活排水や不要物を投棄したゴミ穴と考えられている（佐久間・小村田前掲）。漆椀に共伴した陶磁器は、19世紀初頭から前葉の時期に限定でき、該期の良好な基準資料となりうる内容を持っている。なお、出土した漆器には、宝暦7年（1757年）に佐沼に入府した亘理家の家紋である「三日月に九曜文」をもつ椀と、それに伴う蓋（図114-72・78）が存在する。

宮城県加美郡宮崎町に位置する切込窯跡では、宮城県教育委員会による調査において、中山窯跡下方の平場で検出された、貯水池構築時の整地層から、窯や工房からの廃棄物に混じって漆器が出土している。漆器の廃棄された時期は、共伴した磁器が切込編年（佐藤広史ほか前掲）の第Ⅰ期から第Ⅱ期に相当することから、窯が造られた天保年間から、生産不振に陥った慶応年間、即ち、1830年代から1860年代に限定できる。

仙台市太白区に位置する富沢遺跡では、第88次調査で検出された第1土坑（ゴミ穴）から漆椀の蓋が1点出土している。この資料については、皿と報告されているが、摘み（高台）内に桔梗が比較的大きく描かれていることから、椀蓋と理解した。共伴した陶磁器の多くは18世紀末葉以降のもので、特に19世紀代のものが主体的である。

以上の資料を年代順にならべ、器種毎の変遷を図114に示した。

次に器種分類について述べる。近世の椀は、飯、汁、平、壺の四ツ椀ないしはこれに腰高または坏を加えた椀揃えが一般的な形態だといわれている（中井さやか1992）。また絵画資料に

器種	年代	椀身A類	椀身Bla類	椀身Cla類	椀身C1b類	椀身C2類	椀	蓋
17世紀初頭	17世紀初頭	1 	2 	3 	4 	5 	6 	7 
17世紀初頭	17世紀初葉	8 	9 	10 	11 	12 	13 	14 
17世紀後半	17世紀後半	15 	16 	17 	18 	19 	20 	21 
18世紀	18世紀後半	22 	23 	24 	25 	26 	27 	28 
19世紀	19世紀	29 	30 	31 	32 	33 	34 	35 
17世紀初頭	17世紀初頭	36 	37 	38 	39 	40 	41 	42 
17世紀後半	17世紀後半	43 	44 	45 	46 	47 	48 	49 
18世紀	18世紀後半	50 	51 	52 	53 	54 	55 	56 
19世紀	19世紀	57 	58 	59 	60 	61 	62 	63 
17世紀初頭	17世紀初頭	64 	65 	66 	67 	68 	69 	70 
17世紀後半	17世紀後半	71 	72 	73 	74 	75 	76 	77 
18世紀	18世紀	78 	79 	80 	81 	82 	83 	84 

図114 仙台藩領内出土の漆器の変遷  
Fig. 114 Chronological sequence of lacquerwares belonging to pre-modern period from sites in Sendai-han

は、菓子椀という名称で蓋付きの大型椀が認められる。しかし、考古資料は勿論、伝世品に関しても、用途を特定することは困難な場合がある（松田・羽野1939）。さらにこれらの名称と用途が必ずしも一致するとは限らない。本稿では、椀を椀身と椀蓋とに大別し、前者を8類型に細分した。器高の低い椀身と蓋とは、形態上分別困難なものも存在するが、体部外面の文様の向きや高台（摘み）内の文様の有無などからできる限り両者の分別を行った。また、一緒に出土した漆椀の組み合わせから、器高の低い椀身なのかそれとも蓋なのか、判断可能な場合もある。椀以外の器種については、資料点数も少なく、現状で細かな検討を行うことは困難であるため、今回は資料の呈示にとどめ、分類は行わなかった。

椀身A類 口径と深さの比率が2：1より深めの椀。高台が高く、全体に大型である。胴部下半は膨らみを帯びているが、胴部上半から口縁にかけては直線的に立ち上がる。高台内のロクロ挽き込みが極端に浅く、底部が厚い。

椀身B類 口径が深さの2～3倍の椀。A類に比して浅めであるが、口径は同じか、若干大きめの値をとり、A類同様、比較的大型の椀である。体部と高台の形状により、次の3類型に細分できる。

B 1a 類 体部に稜線を持たず、高台は、A類同様、高めでロクロ挽き込みが極端に浅い。

B 1b 類 体部に稜線を持たず、高台は低く底部も薄い。

B 2 類 体部下半に一段の稜を有する（「一文字腰」）。体部上半から口縁にかけては直線的に開く。高台は比較的高めである。

椀身C類 口径が深さの3～4倍ある浅めの椀。体部と高台の形状により細分できる。

C 1a 類 体部下半が膨らみ口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台径は大きい傾向にある。高台は高めで、ロクロ挽き込みが浅く、底部が厚い。

C 1b 類 体部下半が膨らみ口縁の立ち上がりも急で直線的である。高台は低いが径は大きい傾向にある。

C 2 類 体部が筒状に短く直立する。体部の中位に、タガ状の隆帯や2条の稜線（「面取り」）を持つ場合がある。高台はいずれも低い。

C 3 類 体部のカーブは緩やかで、半球状を呈する。高台は低い。

次に、各類型の消長と変遷に関して年代順に述べる。

16世紀末から17世紀初頭の下草古城跡の資料（1～17）では、椀身に関しては、A、B 1a、C 1a、C 1bの4類型が認められる。なかでもC 1a類とC 1b類が主体を占めている点が特徴的であり、そこに本資料群の時代的特徴がよく現れていると言える。C 1b類は、13世紀～14世紀に比定できる宮城県栗原郡高清水町観音沢遺跡出土資料（加藤・阿部1980）、13世紀後半～14世紀初の仙台市若林区今泉城跡11号溝底面・埋土下層出土資料（佐藤洋ほか1983）、14

世紀前半～15世紀後半の同溝埋土上層出土資料、14世紀末～15世紀前半に比定される仙台市太白区中田南遺跡8号井戸跡出土資料（太田昭夫1994）、同じく15世紀後半～16世紀の中田南遺跡61号溝出土資料、16世紀代と考えられる今泉城跡37号土坑一括出土資料（篠原信彦ほか1980）等で確認でき、少なくとも宮城県域では、中世全体を通じて漆椀のなかで最も主要な器種といえる。一方、A類・B1a類・C1a類は、高台が高い割にロクロ挽き込みが浅いという共通性があるが、このような特徴を有する漆椀は、宮城県域では、15世紀後半から16世紀に比定されている中田南遺跡第1号堀跡・第61号溝跡出土例が最も古い。全国的にみた場合でも、清洲城下町遺跡（鈴木正貴編1994）、一乗谷朝倉館跡遺跡（福井県教育委員会1979）、葛西城址遺跡（古泉弘編1983）等の16世紀代の漆椀の中には少量認められるものの、15世紀前半以前の確実な例は見いだせない。C1b類が13世紀以来の伝統的な器形であるのに対して、A類・B1a類・C1a類は16世紀になって出現した新しい器形と言えよう。また、後述するように、A類とB1a類は江戸時代を通じて変化しながらも、幕末まで存在していることが確認できるが、C1a類に関しては17世紀前葉以降の出土例が見あたらない。C1a類は、C1b類同様、体部については中世的な形態を有しており、高台については、先述の通り、近世的な特徴を有していることから、中世末～近世初頭の時期に年代を限定できる可能性がある。装飾との関係では、A類では内外両面黒地に朱で文様が描かれる（1, 2）のに対して、B1a類・C1b類や蓋は、内朱外黒地に朱で文様を描くものが多い（3, 7～13）。C1b類は文様を持たない。文様は、密な木の葉・植物文、線描きによる千鳥（鶴）文、三引両文の3種に大別でき、後二者は、後述する仙台城出土の17世紀初頭～前葉の資料との共通性が強い。下草古城跡・仙台城ともに、出土した漆器に使われている三引両文は、外側にしなった形の「しない三引」に限られるようである。「しない三引」は、二代藩主伊達忠宗が好んで用いた家紋といわれ（高橋あけみ1996）、忠宗の墓である感仙殿に副葬された遺品のなかには、表黒漆塗地に「しない三引」と九曜文を金蒔絵で散らした鞘を持つ糸巻太刀が見られる（伊東信雄編1985）。

17世紀初頭から前葉の仙台城出土資料（18～42）では、下草古城跡に存在していたC1a類が欠落し、新たにB1b類とC2類が加わる。中世以来の伝統的なC1b類は残るが、量的には激減する。C2類に分類した29の体部には、タガ状の隆帯が巡る。同様の漆椀は、江戸遺跡においては、千代田区都立一橋高校地点（都立一橋高校内遺跡調査団1985）の17世紀後半以降の資料や、港区増上寺子院群（安藤広道1988）の18世紀前半以降の資料に確認できる。江戸中期以前に製作されたとされる漆椀の伝世品を集成した『時代椀大観』（松田・羽野前掲）には、「淨法寺椀」として、体部にタガ状の隆帯が巡る「壺椀」と「平椀」が紹介されている（同書図版21の資料）。仙台城二の丸跡第9地点の出土資料は、このタイプの漆椀が確実に寛永以前に存在することを示す例として重要である。装飾との関係では、椀身・蓋とともに内外両面黒地

塗りのものが多い。これは、この時期の資料に限って、外面同様、内面にも朱漆により文様を描いたもの（18～20, 22～24, 30～33, 35・36）が多いことと関係すると考えられる。文様は、線描きによる千鳥（鶴）文と、伊達家の家紋の一つである三引両文が圧倒的に多く、器種との関係では、両方の文様がほぼ同じ様な使われ方をしている。この2つの文様以外では、蕪（30）や瓜（37）といった野菜文が見られる。家紋に関しては、器面に3単位配置する例が多いが、2単位の例も存在する。年代的に若干先行する下草古城出土例（13）は2単位であり、より後続する時期のものは3単位であることから、この時期に家紋を3単位に配置する構成が確立した可能性がある。線書きによる千鳥（鶴）文に関しては、「淨法寺椀」に類例が認められる（前掲『時代椀大観』の15の資料）。黒地に朱漆で向かい合う鶴と亀を描き、余白に細密線と松竹・千鳥を配置する構図は、22や31の出土遺物例に近似する。仙台城出土の漆椀の技術的系譜を考える際に、地理的にみても、淨法寺系の漆器との関連性は充分考慮すべき問題であり、今後、自然科学的手法を用いた分析により、使われている樹種の同定や塗りの工程を明らかにした上で、両者の比較を行う必要がある。

17世紀後半の資料（43～50）では、B2類が新たに加わる。B2類は「一文字腰」と呼ばれる器形であるが、江戸遺跡においては、17世紀後半の港区増上寺子院群出土例が古く、一般的になるのは18世紀以降であるとされる（中井さやか1992）。同様の傾向は、仙台藩領内の遺跡出土事例についても看取できる。文様に関しては、仙台城においても、伊達家以外の家紋をあしらったもの（49）が認められるようになり、本期以降、三引両文にとって代わり主体を占めるようになる。また、装飾に関して最も注目すべきは、高台内に、長方形あるいは楕円形の枠と文字を朱書きあるいは朱印した銘をもつ椀（43・45・46・48・50）が流行する点である。類例は江戸遺跡出土資料にも存在するが、ある時期に特別流行するといった傾向は認められないようである。同様の資料は、仙台城では二の丸跡第9地点の16号土坑出土資料にも存在しており（52）、17世紀末・18世紀初頭をピークとして18世紀後葉頃まで認められる装飾技法である。仙台市若林区北目城跡では、「障子」・「畠」状の防御施設を伴う大規模な堀の最下層から、万曆様式の青花に共伴して、扇に「大町四丁目 作左衛門」の銘を高台内に押印した漆椀が出土している（金森安孝1996）。仙台城出土の漆椀の高台内の銘も、判明するものは、すべて人名と考えられる。北目城跡出土例とは年代的な開きがあるため、両者が直接関係するか否かは不明である。しかし、このような製作者に関わるようなブランド銘を記することで、その製品の付加価値を高めようとする手法が、17世紀末・18世紀初頭に流行する背景として、同様の手法が多用されていた京焼や肥前の陶磁器からの影響を無視するわけにはいかないであろう。材質の違いを越え、食器の差別化が一斉に進行した背景には、元禄期を中心とする時期の消費生活の質的向上があったと考えられる。

18世紀後葉の資料（51～67）は、仙台城二の丸跡第9地点の15・16号土坑から、まとまって出土している。中世以来の伝統的な器形をとどめたC 1b類は存在していない。蓋では、深さのある、椀を伏せた器形のもの（60～65）が主体を占め、前代とは様相を異にする。文様に関しては、江戸遺跡から出土する漆椀と共に多くの認められるようになる。

19世紀の資料（68～82）では、陶磁器の椀を写したと考えられるC 3類（74）が認められるようになる。この資料は、胴部下半の器壁が厚く、底部から口縁部に向かって次第に薄くなる。A類（68）やB 1a類（69～71）といった深めの椀も、胴部下半の器壁が厚く、底部から口縁部に向かって次第に薄くなるように作られている。このような特徴は、19世紀の漆椀の一部に顕著であり、時代的な特徴である可能性がある。蓋では、口縁部の立ち上がりが急な形態のもの（77, 80）が新たに見られるようになる。

以上、年代を追って漆器の変遷を概観してきた。陶磁器の項で触れたように、近世初頭の仙台城では、椀は漆器、皿は中国産磁器という使い分けがなされており、その時期、供膳具に占める漆器の位置はかなり重要であった。肥前磁器や相馬陶器が普及するにつれ、時代とともに、供膳具の主体は陶磁器で占められるようになり、漆器の出土量自体も減少する。出土した漆器の生産地については、自然科学的手法も用いた分析等で今後確定しなければならないが、冒頭で述べた、近世後期に領内で生じた漆栽培の低調化は、出土する漆器の減少と無関係ではないであろう。

## ② 箸

仙台城二の丸跡では、第5地点と第9地点の調査で多量の箸状木製品が出土している。第5地点から出土した箸状木製品の大部分は、二の丸が拡張される元禄年間以前に位置づけられる。第9地点では、箸状木製品は、17世紀初頭～前葉の8・7層および16号溝と、18世紀後葉のゴミ穴である16号土坑から出土している。箸状木製品とした遺物の用途や時期的な変化を検討するため、先端および断面の形状、長さ、使用痕跡等の観察を行った。

先端の形状は、特に加工を加えず切断面を残すもの（A類）、先細に作り出しが切断面を残すもの（B類）、先端を尖らし切断面を残さないもの（C類）、ヘラ状に作り出しその（D類）に分類した。完形品での両端の形状の組み合わせは、10類型確認され、その結果を出土場所毎に表22に示した。なお、竹を素材とした串の可能性の高い資料は除いた。表に示した箸状木製品のうち、漆塗りと思われる資料は、第9地点16号土坑出土のAA類に1点みられるのみで、残りは全て白木である。

量的に問題のある第9地点下層の資料を除き、先端および断面の形状では、両端ともに加工を加えず、断面が略円形のAA類が圧倒的に多い。文献に残された名称との対比では、AA類は、AB類、BB類とともに、「寸胴箸」と呼ばれるものに相当すると考えられる。

表22 仙台城二の丸跡出土箸状木製品の先端形状

Tab. 22 Count of chopsticks from the secondary citadel of Sendai Castle

箸状木製品の先端形状	AA	AB	AC	AD	BB	BC	BD	CC	CD	DD	合計
第9地点8・7層、16号溝 (17世紀初頭～前葉)	0	0	1 (1)	2	2	0	0	0	0	0	5 (1)
第5地点基礎9区VII層 (17世紀末葉)	138 (1)	8	6	0	3 (1)	1	8	1	2	0	167 (2)
第9地点16号土坑 (18世紀後葉)	370	1	3 (1)	3	0	0	0	0	1	1 (1)	379 (2)

カッコ内は断面が方形を呈するものの点数

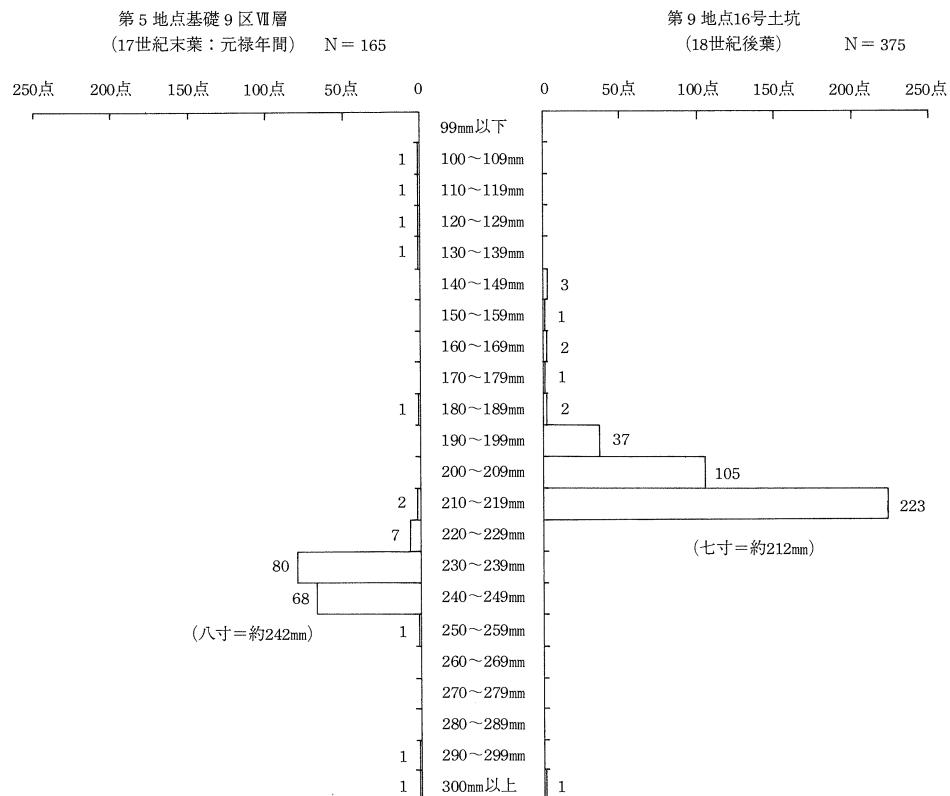


図115 仙台城二の丸跡出土箸状木製品の長さ

Fig. 115 Histograms for length of chopsticks from the second citadel of Sendai Castle

次に資料点数が多く、時期的にも限定できる、第5地点基礎9区VII層出土資料と第9地点16号土坑出土資料を用いて、両者の長さを比較する（図115）。その結果、前者は240mm前後に、後者は210mm前後に顕著な集中が認められた。即ち、17世紀末葉には8寸の箸が用いられ、18世紀後葉には7寸の箸に短くなっていることが明らかとなった。

17世紀初頭から前葉に比定できる第9地点8・7層および16号溝出土資料は、量的に限られるため検討できないが、三の丸跡の調査成果（仙台市教育委員会1985）を援用することでこの時期の様相を窺い知ることができる。三の丸跡出土の箸の約98%は、三の丸造営以前の遺構である6号土壙と9号土壙から出土している。三の丸跡では、長さ9寸から1尺の「中太両細」の箸が多く認められる。

今回検討した箸を出土した遺構や整地層からは、箸とともに多量の土師質土器の皿が出土しており、それらは、儀礼的色彩を帯びた宴会の席で使用された後、まとめて捨てられたものと考えられる。仙台城では、儀礼的な宴会等においては、かわらけとともに白木の箸も、ハレの場を飾る伝統的な供膳具として使われ続けるが、白木の箸の長さに関しては、時代が下るにつれ短くなる傾向にある。白木の箸が短小化する背景には、伝統的な儀礼が、形を維持しながらも次第に形骸化していくという事情が存在していたと考えられる。

（註1）例えば漆の栽培・採取を奨励した文書としては次のような史料がある。

- ・元和4年（1618年）「伊達政宗桑植付等黒印條目」（大日本古文書・家わけ第三・伊達家文書之二所収 八二九号文書）
- ・元和6年（1620年）「石母田宗頼他三名連署漆植付等條目」（同上 八三四号文書）
- ・元和7年（1621年）「伊達政宗漆植付等黒印條目」（同上 八四〇号文書）
- ・寛永3年（1626年）「伊達政宗漆搔等申付状」（同上 八七〇号文書）

（註2）陸前唐桑古館屋敷鈴木家文書第八二号文書（宇野脩平編1955の105～107頁所収）

（註3）斎藤報恩会所蔵の『相去御足輕方用法記』（司東真雄編1973の377～379頁所収）

#### 《引用・参考文献》

- 天野順陽 1995 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 166 pp. 3～72  
天野順陽 1996 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書 169 pp. 9～90  
安藤広道 1988 「(4)植物製品 容器 A漆椀類」 『芝公園一丁目増上寺子院群』  
東京都港区教育委員会 pp. 320～362  
伊東信雄編 1979 『瑞鳳殿伊達政宗の墓とその遺品』 瑞鳳殿再建期成会  
伊東信雄編 1985 『感仙殿伊達忠宗・善応殿伊達綱宗の墓とその遺品』 財団法人瑞鳳殿  
宇野脩平編 1955 「陸前唐桑の史料－日本漁村史料－」 『常民文化研究』 72

- 太田昭夫 1994 『仙台市中田南遺跡』 仙台市文化財調査報告書182
- 太田昭夫 1995 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(8)』 仙台市文化財調査報告書203
- 加藤道男・阿部博志 1980 「観音沢遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』  
宮城県文化財調査報告書72 pp. 131~347
- 金森安孝 1996 「関ヶ原の戦いの出撃基地北目城跡を掘る」 『仙台城 歴史群像名城シリーズ13』  
学習研究社 pp. 44~47
- 旧芝離宮庭園調査団 1988 『旧芝離宮庭園』
- 小井川和夫 1980 「八沢要害遺跡」 『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』  
宮城県文化財調査報告書72 pp. 351~398
- 古泉弘編 1983 『葛西城』 葛西城址調査会
- 佐久間光平・小村田達也 1995 『佐沼城跡』 追町文化財調査報告書2
- 佐藤洋ほか 1983 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書58
- 佐藤広史ほか 1990 『切込窯跡』 宮崎町文化財調査報告書3
- 里見藤右衛門 1798 『封内土産考』 (仙臺叢書第3巻所収)
- 司東真雄編 1973 『北上市史 第4巻 近世(2)』
- 篠原信彦ほか 1980 『今泉城跡』 仙台市文化財調査報告書24
- 鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡IV』 愛知県埋蔵文化財センター
- 須田良平 1993 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書154 pp. 7~68
- 須田良平ほか 1994 「下草古城跡」 『下草古城跡ほか』 宮城県文化財調査報告書160 pp. 1~129
- 高橋あけみ 1996 「Ⅱ章近世 四. 伊達家をめぐる美術 伊達家の漆工」  
『仙台市史 特別編3 美術工芸』 pp. 259~276
- 中井さやか 1989 「一六世紀の漆椀」 『考古学の世界』 慶應義塾大学民族学考古学研究室編  
新人物往来社 pp. 380~395
- 中井さやか 1992 「近世の漆椀について」 『江戸の食文化』 江戸遺跡研究会編 吉川弘文館  
pp. 180~204
- 福井県教育委員会 1979 『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査』
- 松田権六・羽野楨三編 1939 『時代椀大観 第一輯』 寶雲舎
- 山田揆一 1917 『仙臺物産沿革』 (仙臺叢書別集第2巻所収)
- 吉岡恭平・篠原信彦 1989 『富沢遺跡・泉崎浦遺跡』 仙台市文化財調査報告書126

## (2) 下駄

下駄については、二の丸跡と三の丸跡から、いくつかのまとまった資料が出土している。まだ各時期の資料点数が少なく、これらの資料が、各時期の全体像を表しているとは限らない。おのずと検討にも限界があるが、ここにあらためて時期の判明する一括資料を提示するとともに、各時期の特徴について、いくつかの指摘できる点を整理しておきたい。

### ① 一括資料の概要

二の丸跡で、これまでに下駄が出土しているのは、以下の4群の資料である。これらは、年代が限定できる資料である。

第9地点Ⅰ期（17世紀初頭～前葉）

第5地点元禄年間の整地層（17世紀末～18世紀初頭）

第9地点16号土坑・15号土坑（18世紀後葉）

第9地点1号池（19世紀中葉頃）

また三の丸跡でも、まとまって下駄が出土している（佐藤洋ほか1985）。三の丸跡では44点の下駄が出土しており、その内40点が、Ⅰ期の6号土坑からまとまって出土している。図示されている資料は、全てこの6号土坑から出土したもので、寛永15年（1638年）以前の17世紀初頭～前葉に限定できる資料である。

### ② 分類基準

台部と歯の作り方から、連歯下駄・差歯下駄・無歯下駄に大別する。

連歯下駄は、一木から台と歯を切り出したもので、歯の作り方で細分される。独立した二枚歯をもつもの、前歯は台前端部から下りて独立せず後歯のみが独立するもの、前後とも台端部から続いて独立しないものが認められる。

差歯下駄は、別材で作った台と歯を組み合わせるものである。台の表に歯のほぞが露出する露卯差歯下駄と、台裏の溝に歯を差し込みほぞを持たない陰卯差歯下駄に分けられる。

無歯下駄は、歯をもたないもので、一枚板のものと、前後で分かれるものがある。

連歯下駄と差歯下駄の台の平面形態には、長円形のものと角形のものがある。なお、出土点数の比較にあたっては、差歯下駄の場合、台と遊離した歯を数えると、実際より多い数値となる可能性が高いため、台部の点数で数えることとする。

### ③ 各時期ごとの様相

17世紀初頭～前葉の第9地点Ⅰ期では、8点の下駄が出土している（図116、年報8）。もう1点、下駄かと思われる資料があるが、確実ではないため除外した。全て白木の下駄で、漆塗りのものは無い。3点が連歯下駄、5点が露卯差歯下駄である。連歯下駄は、いずれも前後の歯が独立するものである。後ろの緒孔（横緒孔）は、全て後歯の前に開けられている。

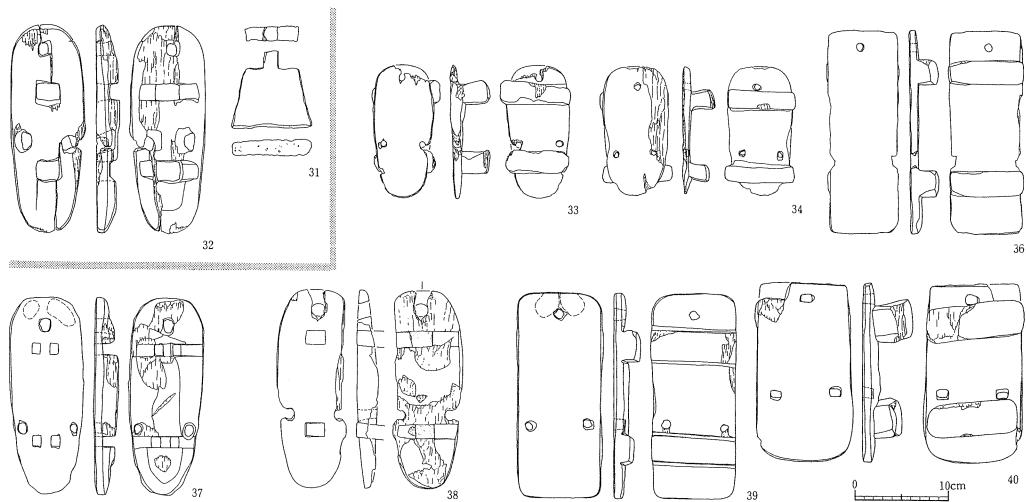


図116 仙台城二の丸跡第9地点I期の下駄

Fig. 116 Clogs of phase I from NM9

the end of the 16th century-  
the early 17th century

同じく17世紀初頭～前葉の、三の丸跡I期に属する6号土坑出土の下駄は、34点が図示されている。差歯下駄の歯の部分だけのものが1点あり、それを除くと33点となる。図117には代表的な資料を集めて提示した。11など3点に漆が塗られている以外は、白木である。16点が連歯下駄である。そのうち14点が独立した二枚歯のものである。10は、前後とも歯が台端部から続いて独立しないものである。11は、前歯が台前端部から下りて独立せず、後歯のみが独立するものである。両者とも、前歯には、緒孔の部分にえぐり込みが見られる。露卯差歯下駄は13点出土している。無歯下駄は2点出土しており、一枚板のものである。いずれも前後の緒孔を開ける(19)。20は、前後に2個づつの釘孔が開いており、あるいは歯を打ち付けたものかも知れない。連歯下駄と差歯下駄の横緒孔は、全て後歯の前に開けられている。

二の丸跡第5地点の元禄年間の整地層からは、14点の下駄が出土している(図118)。連歯下駄が7点、露卯差歯下駄が4点、無歯下駄が3点である。連歯下駄は全て独立した二枚歯をもつものである。無歯下駄は3点とも、一ヶ所を分断し、前後に分けた「中折り下駄」である。表を打ち付けるための釘が残るもの(39・40)と、表を縫いつけるための小孔が見られるもの(38)がある。連歯下駄と差歯下駄では、連歯下駄に1点と差歯下駄に1点、横緒孔を後歯の前に開けるものがある以外は、後歯の後ろに緒孔が開けられている。

18世紀後葉の二の丸跡第9地点16号・15号土坑では、9点の下駄が出土している(図118)。連歯下駄が8点に対して差歯下駄が1点と少ない。出土点数が少なく、この比率を一般化できるかどうかは問題が残る。連歯下駄は7点が、独立した二枚歯をもつものである。もう1点の連歯下駄は、前歯が台前端部から続き、その部分が斜めにけずられている「のめり」があるも

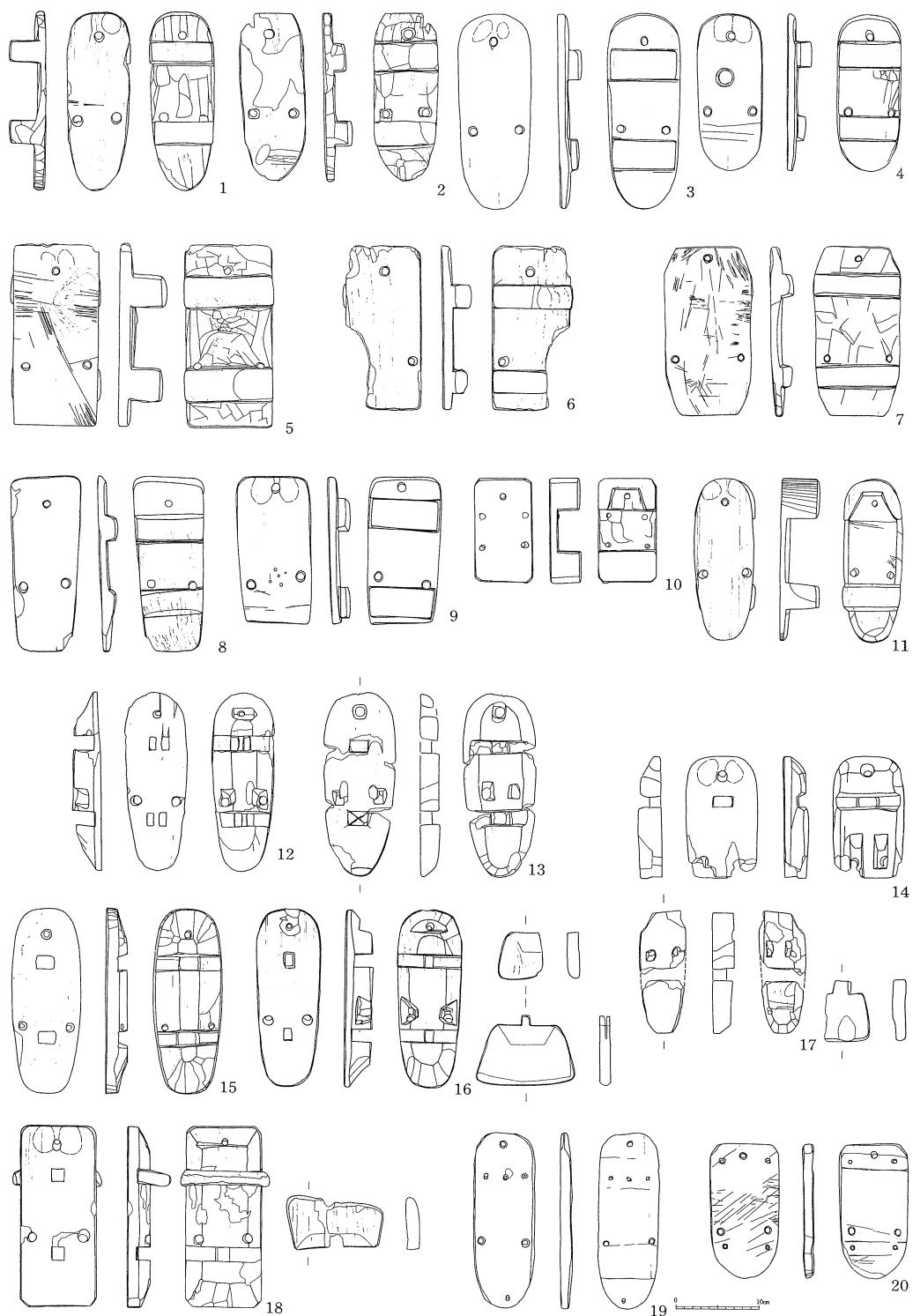
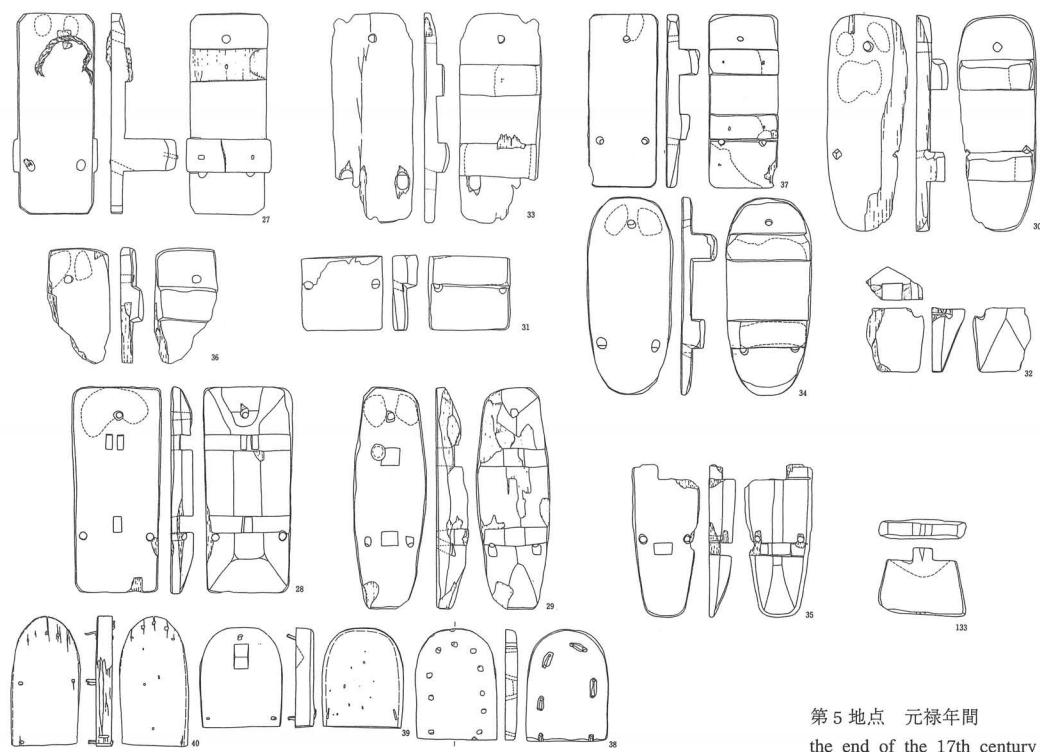


図117 仙台城三の丸跡 6号土坑出土の下駄

Fig. 117 Clogs from Pit 6 at the third citadel of Sendai Castle

the end of the 16th century-the  
beginning of the 17th century



第5地点 元禄年間  
the end of the 17th century

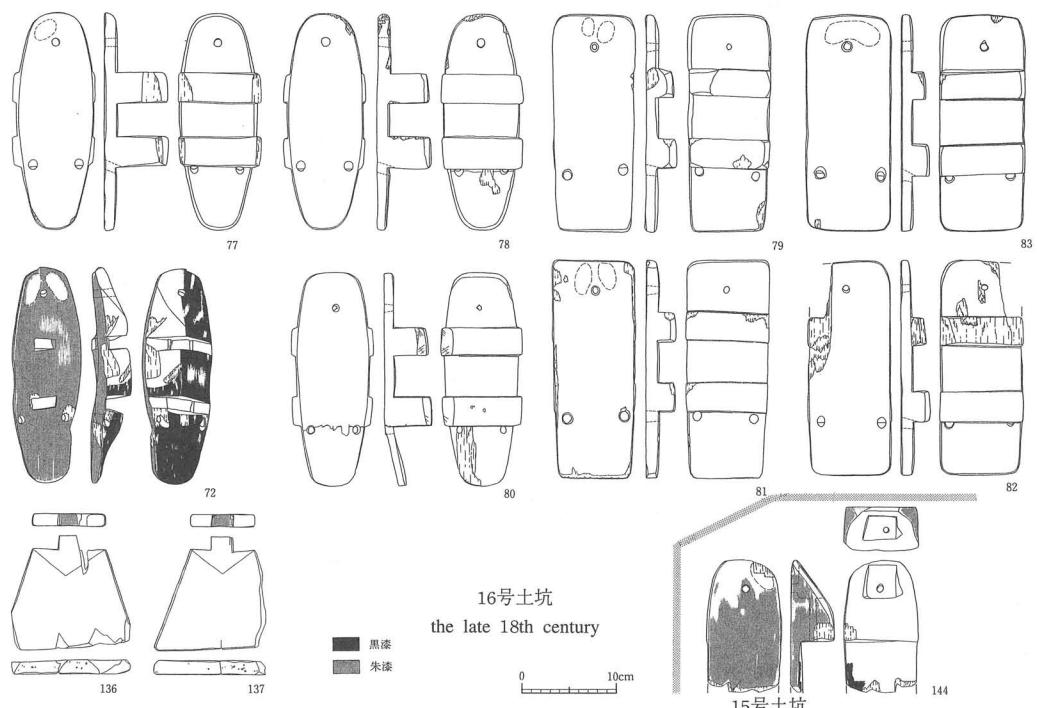


図118 仙台城二の丸跡第5地点および第9地点15・16号土坑出土の下駄

Fig. 118 Clogs from NM5 and Pit 15, 16 at NM9

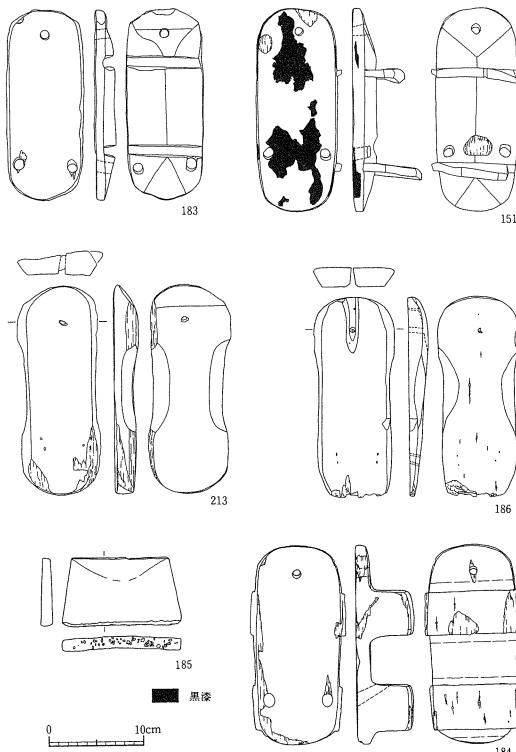


図119 仙台城二の丸跡第9地点1号池出土の下駄  
 Fig. 119 Clogs from Pond 1 at NM9  
 the early 19th century-the middle 19th century

歯の前に開けるもの（151・184）と、後ろに開けるもの（183）の両方がある。

#### ④ 小結

最後に、各時期ごとの様相を、簡単にまとめておきたい。

出土点数が少なく、比率を細かく検討するのは困難であるが、17世紀初頭～前葉と元禄年間の資料では、連歯下駄と露卯差歯下駄が、それぞれ一定量存在する。確實にどちらが多いとは、現状では言い難い。一方、18世紀後葉の資料では、連歯下駄が8点に対して、露卯差歯下駄が1点のみと少ない。この時期の出土点数が少なく、これを一般化できるかどうかは問題があるが、特徴的である。細かな点では必ずしも一致しないが、江戸時代初頭から連歯下駄と露卯差歯下駄が併存し、次第に露卯差歯下駄が減少する一方で、連歯下駄が増加していくという点で大きく見るならば、江戸の遺跡出土の下駄の様相と共通する変化をたどっていると言えるだろう（古泉弘 1979）。

連歯下駄では、各時期を通じて、独立した二枚歯をもつものが多く、前歯あるいは前後の歯が、台の端から続くものは少ない。差歯下駄では、陰卯差歯下駄は19世紀中葉頃の資料でのみ認められ、18世紀後葉以前の資料には見られない。この点も、陰卯差歯下駄は18世紀後葉以前

のである（144）。差歯下駄は、露卯差歯下駄である（72）。この台部には、136・137の歯が伴う。漆塗りのものは、連歯下駄・露卯差歯下駄に各1点づつ認められる。横緒孔は、確認できるものは全て、後歯の後ろ側に開けられる。

19世紀中葉頃の二の丸跡第9地点1号池からは、5点が出土している（図119）。連歯下駄が1点、差歯下駄は2点、無歯下駄が2点である。差歯下駄は2点とも、陰卯差歯下駄である。これには漆塗りのものがある（151）。無歯下駄は2点とも一枚板のもので、台裏側の側面の中程を、半月形に刳る。前の緒孔だけが開けられ、後ろは両側それぞれに2個小さな釘孔が認められる。鼻緒は、前は孔に通し、後ろは小さな釘で止めたものと考えられる。連歯下駄と差歯下駄の横緒孔は、後

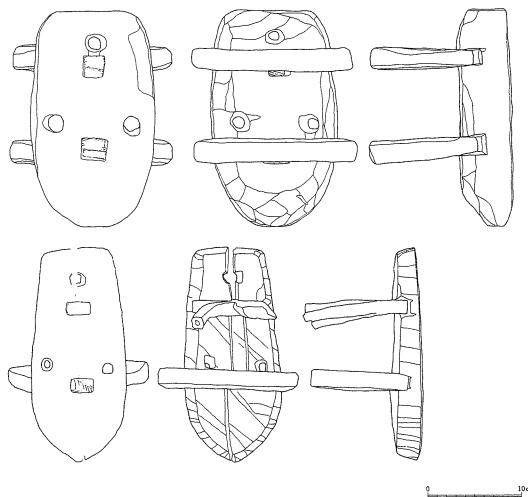


図120 下草古城跡出土の下駄

Fig. 120 Clogs from Shimokusa Castle  
the end of the 16th century-the beginning of the 17th century

る。これまでの出土例では、18世紀後半に出現するとされており（市田京子1992）、これを遡る資料である。

連歯下駄と差歎下駄の横緒孔の位置については、17世紀初頭～前葉の資料が全て後歯の前にあるのに対して、元禄年間では後歯の前にあるものが少數となり、代わって後歯の後ろ側に開けるものが主体を占める。18世紀後葉には、後歯の後ろ側に緒孔を開けるものに統一されている。喜多川守貞の『守貞謹稿』には、江戸の下駄について、「近年、緒長キヲ好ミ、後歯ノ後ニ、二孔ヲ穿ツ。先年ハ、江戸モ後歯ノ前ニ穿ツ。京阪、今モアトバノ前ニ穿ツ。」とあり、緒孔の位置の変化はこの記述と一致する。ただし、仙台城の資料では19世紀中葉頃の資料に、再び後歯の前に緒孔を開けるものが見られる。この理由については明らかにし難いが、あるいは生産地による違いも考慮しておく必要があるかもしれない。

仙台城以外の仙台藩領内では、黒川郡大和町の下草古城跡の平成5年度の調査などにおいても、ややまとまって下駄が出土している（天野順陽ほか1994）。これらの下駄は、伊達政宗の三男である宗清が住んでいた慶長15年（1610年）から元和2年（1616年）の時期と考えられる遺構から出土している。連歯下駄と露卯差歎下駄が出土しており、基本的な様相は仙台城跡出土の下駄と共通する。ただし、露卯差歎下駄の中には、前端が直線的で、台の後端が舳先のように尖る平面形のものがある（図120）。このような形態のものは、仙台城では出土していない。同様のものは、富沢遺跡86次調査においても出土している（佐藤甲二1997）。下草古城の報告では、歯の高さが12cm程と高いことと、前端が直線的で前屈みになりやすいことから、水仕事用や便所下駄などの特定の用途に使われたと推定している。

にはほとんど使用されていないとされる、江戸の状況と共に通する（古泉弘1979）。連歯下駄と差歎下駄の台の形状では、19世紀中葉頃の資料では明確ではないが、長円形のものと角形のものが、いずれの時期においても併存している。無歯下駄は、17世紀初頭～前葉・元禄年間・19世紀中葉頃の資料に認められる。19世紀中葉頃の資料は出土点数が少ないため確実では無いが、各時期とも無歯下駄の占める比率は、さほど大きくなかったものと思われる。注目されるのは、中折り下駄が元禄年間には出現していることであ

今回は詳しく検討できなかったが、仙台城出土の下駄にも、詳細に見ると様々な形態のものが含まれている。今後、用途の違いも考慮して、検討していく必要があるだろう。

《引用・参考文献》

- 天野順陽ほか 1994 『下草古城ほか』宮城県文化財調査報告書第160集
- 市田京子 1992 「江戸時代の下駄」『考古学と江戸文化』江戸遺跡研究会第5回大会発表要旨 pp. 237~255
- 喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1992 『守貞謾稿』第五巻 東京堂出版
- 古泉 弘 1979 「江戸の出土下駄」『物質文化』32 pp. 10~29
- 佐藤甲二 1997 『富沢・泉崎浦・山口遺跡(10)』仙台市文化財調査報告書第220集
- 佐藤洋ほか 1985 『仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報6』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報8』

### (3) 桶・樽類と円板状木製品

ここでは、平面円形の形状をもつ木製品（桶・樽・曲物など）について検討を加える。曲物や桶・樽類は、その構造上出土時には部材がばらばらになっていることが多く、出土状況に恵まれて復元できたもの以外は、個々の部材から推定していくことになる。出土資料のなかで円板状に成形されたものの大半はそのような部材であると考えられる。

出土した円板状に成形されたものをみると、直径3.9～46.5cm、厚み0.2～1.9cmの様々なもの

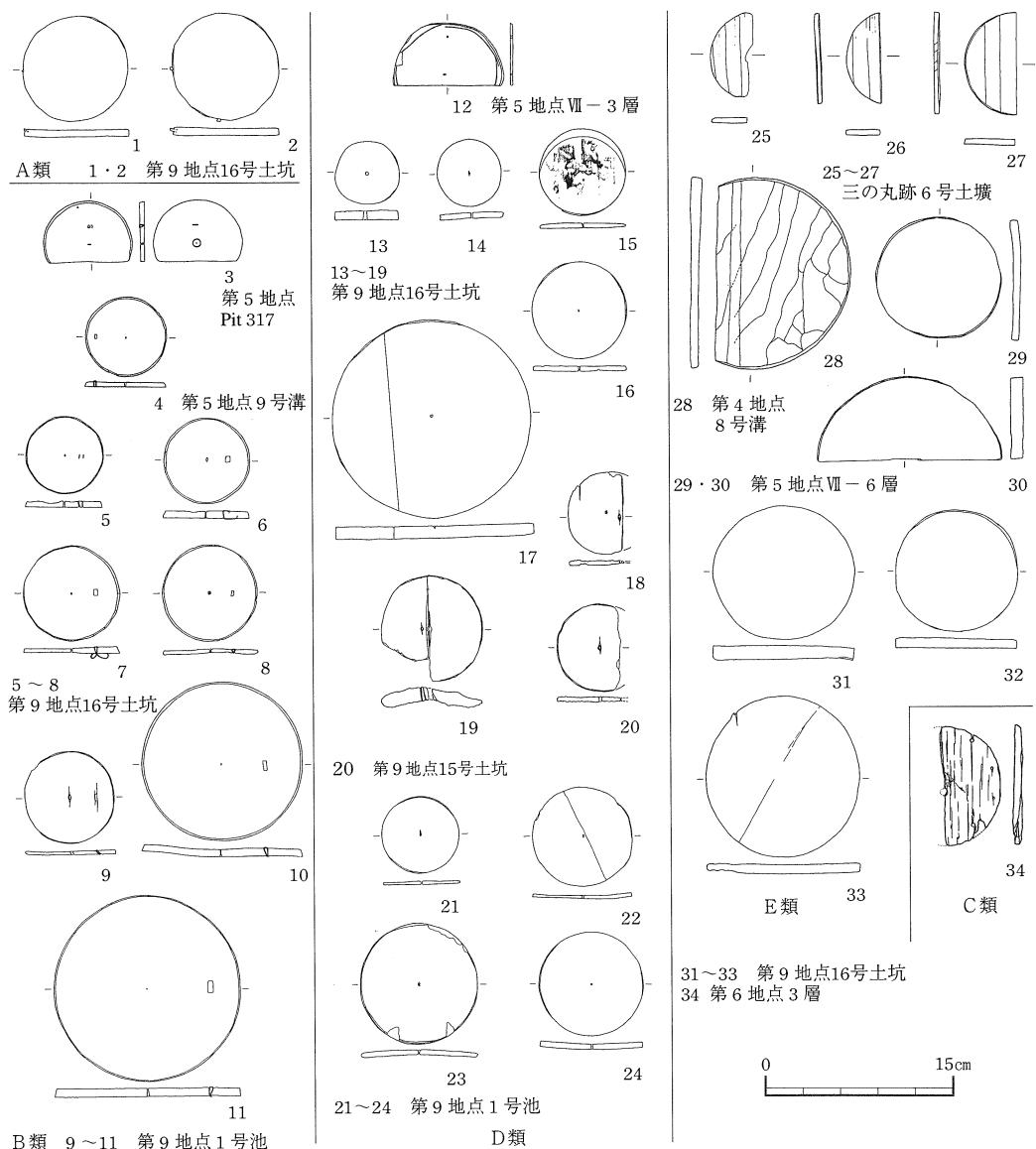


図121 仙台城跡出土円板状木製品

Fig. 121 Wooden implements shaped thin round board from Sendai Castle

がある。これらのうち、栓をはめ込んだとみられる穿孔のあるものや、持ち手をつけた痕跡のあるものは曲物ではなく桶・樽類の天板と考えられ、また、図123-1・7・8のように、周縁際に明瞭な段差をもたせたものは、天板・底板を側板にかぶせるタイプの曲物である。

それ以外のものについては、容器かどうかという点も含めて限定し難いが、直径と厚みに着目してみた場合、直径10cm以下のものに厚みが0.6cmに満たないものが多く認められ、そのように薄いものは直径16cm前後のものにまで散見される。これらは明らかに桶・樽類の部材とわかるものに比べると薄手であり、少なくとも桶・樽類ではなかった可能性が考えられる。これらは第9地点で多量に出土しており、以上の観点から「円板状木製品」として報告したものである。以下では、境界は便宜的であるが、上記の桶・樽類か曲物とみなせる以外のもので、直径17cm以下でかつ厚みが1.2cm以下のものを「円板状木製品」とし、この数値からはずれるものは桶・樽類あるいは曲物の部材として検討してみることにした。

### ① 円板状木製品

第5地点の報告で桶や曲物の蓋、ないしそれに類するものという意味で蓋状木製品と呼んでいたものもこの類である。

第5地点では元禄期の盛土であるⅧ層から主として出土し、その前後の層からも少量出土している。第9地点ではほとんどが18世紀後葉の16号土坑と19世紀中葉の1号池からの出土である。三の丸跡では17世紀初頭～中葉の6号土壙から出土がみられる。

これらを詳細にみると、A—側面に木製ないし竹製の釘が2・3ヶ所認められるもの、B—中心と周縁との中間あたりに一ヶ所樹皮をくくりつけてあるもの、中心の小孔はほとんどにあ

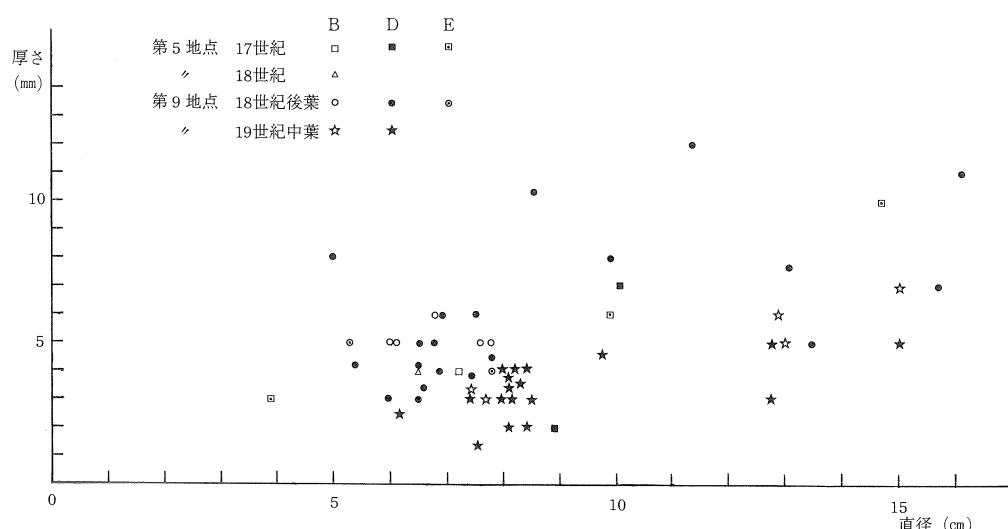


図122 仙台城跡出土円板状木製品の法量分布

Fig. 122 A scatter diagram about wooden implements shaped thin round board from Sendai Castle

るが、まれにないものもある、C—中心一ヶ所と周縁部に多数の小孔があけられるもの、D—中心に小孔のみが認められるもの、E—何の加工も認められないもの、が認められる。

Aは第9地点16号土坑から2点の出土がある。直径8.5~8.6cm、厚み0.6~0.7cmのものである。

Bは第9地点16号土坑・1号池で多く認められ、第5地点にもⅡa期（元禄年間）の出土例（図121-3）がある。直径は6.0~15.0cmの多様なものがある。

Cは第6地点で1点、直径9.5cmのものが出土しているのみである。

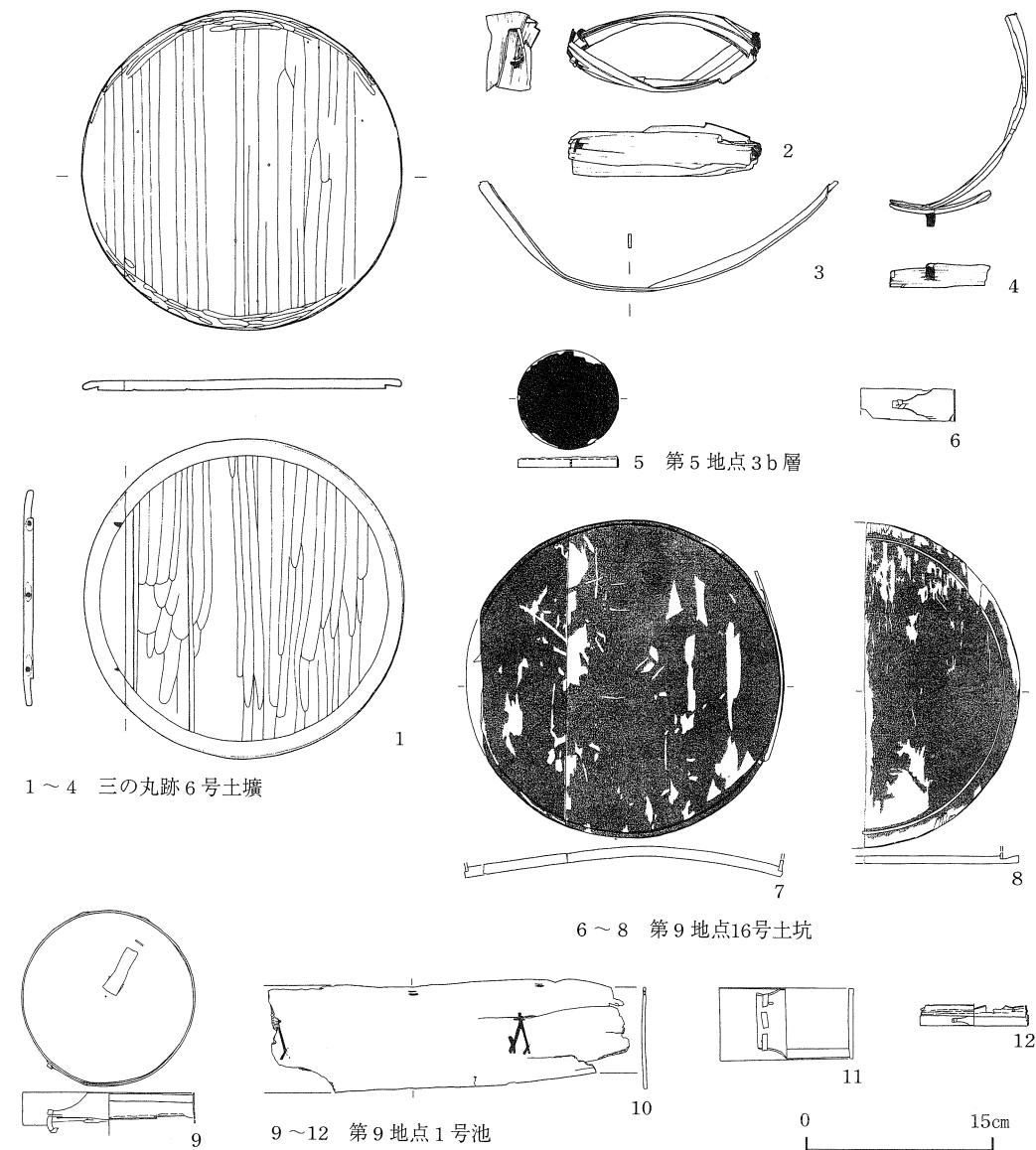


図123 仙台城跡出土曲物

Fig. 123 Round vessels shaped by bending and securing a thin sheet of cypress wood from Sendai Castle

Dは第9地点16号土坑・1号池で多く認められる。直径は5.0～15.0cmのものがある。

Eは第4地点の17世紀初頭～中葉の層と第5・9地点で少量出土している。直径3.9～14.7cmのものがみられる。

図122はこれらの直径と厚みの関係をプロットしたものである。

Bは直径6～8cm、13cm前後、15cmの3ヶ所に分布する。時期的にみると、元禄期・18世紀後葉には6～8cmのものしかないが、19世紀中葉になると13・15cmのものがみられる。

Dは直径5～9cm、10cm前後、13cm前後、15～16cmの4ヶ所に分布しており、時期的にみると、特に径の小さいものでは、元禄期から18世紀後葉にはより小さい方に分布し、厚みにもばらつきが大きいのに対し、19世紀中葉には径はより大きい方、厚みは薄い方に分布し、ばらつきが小さくなっている。より径の大きいグループについても19世紀中葉のものが薄くなり、数値のばらつきが小さくなる傾向が認められる。

これらは桶・樽の天板・底板としては薄すぎると思われ、容器状になるとすれば提灯や三の丸跡で想定されているような柄杓など曲物に使われたものであろう。B・D類の中央に認められる小孔は、円板に成形する際のコンパスの跡の可能性が高く、特にこれが用途に関係するものではないと考えられる。曲物として残存した図123-9の天板には中心に小孔があり、小孔があっても差し支えなかったことがわかる。したがってD類とE類とは、製作技法からみると異なるものかもしれないが、機能的には同等のものとみなしてよいであろう。C類の中心の小孔はB・D類に比して大きく、この孔に機能的意味があった可能性がある。

B類では、特徴的に認められるくくりつけられた樹皮が何のためのものかが問題である。先述の図123-9にも樹皮がくくりつけられているが、この場合は大きな輪を外側に作り出すように、円板には2ヶ所でつけられている点で異なっており、同様のものとすることはできない。図123-9のこの樹皮の意味についても、つまみとするには位置が中心でないことが実用的ではないように思われ、検討を要する。なおさらB類のようなあり方については良好な類例をさがすことが必要である。

側面に着目した場合、木ないし竹の釘が差し込まれているA類は、側板と組み合わされていことがある。B・D・E類では側面に小さな段差をもつものや傾斜をもつものも認められ、前者は図123-12のように端部にタガ状のものが巻き付けられ、側板が段差をもって二重になるような組合せ方、後者は図123-11のような組合せ方が想定される。C類は円板が側板にかぶさるような組合せ方をしたものであろうか。

## ② 桶・樽類

桶・樽の天板・底板・側板と考えられるものは、大部分が第9地点1号池と16号土坑からの出土例である。第5地点ではI a期の3 b層、元禄期の盛土と遺構から少量出土している。

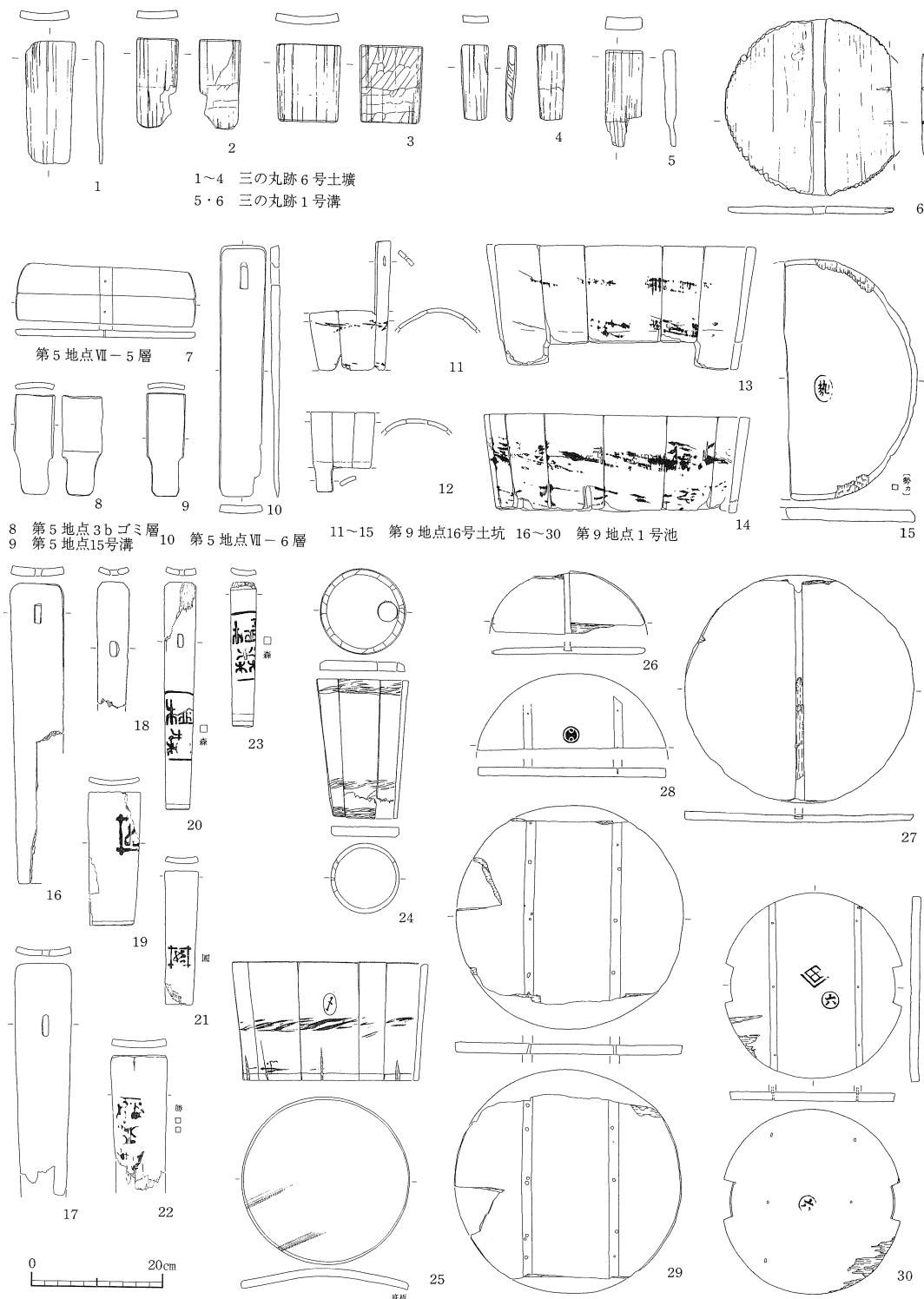


図124 仙台城跡出土桶・樽類(1)

Fig. 124 Troughs and barrels from Sendai Castle(1)

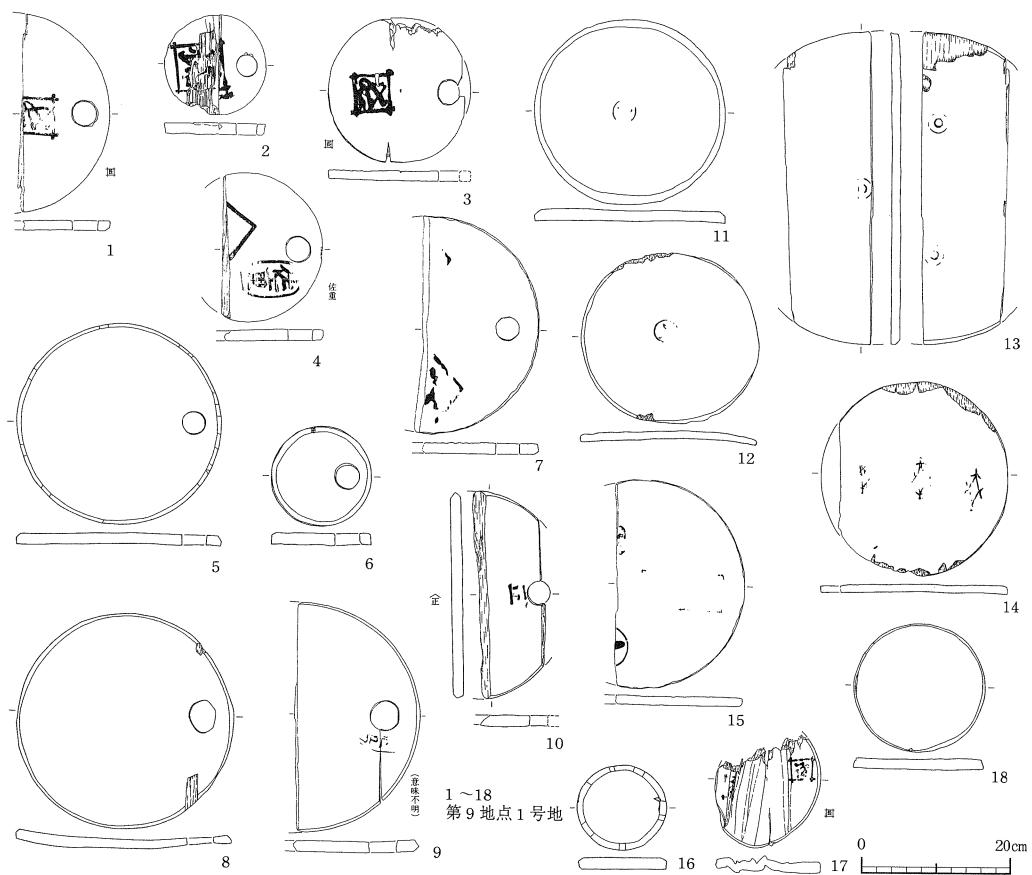


図125 仙台城跡出土桶・樽類(2)

Fig. 125 Troughs and barrels from Sendai Castle(2)

第5地点出土の17世紀代の側板の例は、直径は復元できないが、横木をわたす持ち手部分をもつもの、下半を狭めて足状の部分をつくりだすものと考えられる（図124-8～10）。

18世紀後葉の第9地点16号土坑からは、ある程度形態を復元できる図124-11～14が出土している。13・14は口径40cmをこすもので、前者は足がつかないが、後者は足がつけられる。

19世紀中葉の第9地点1号池からは、形態が復元できたものとして図124-24・25がある。

天板・底板の径には、10～42cmまで多種多様なものが認められる。一枚ないし二枚の板を平行して留めた痕跡のあるものは、持ち手がつけられた開閉式の蓋と考えられる。持ち手の留め方には、ほどにはめ込む方法と、竹ないし木製の釘で留めるものがある。前者は持ち手一枚の場合、後者はどちらの場合にも用いられている。図124-30は二枚の持ち手をもち、周縁の相対する2ヶ所が周縁にそってえぐり取られているものである。図124-29のように両面に痕跡があるものは、補強のため両側につけたものか、単純な蓋とは異なるもの可能性もある。

円形の小孔が周縁より一ヶ所穿たれるものは、小孔に木製栓がさしこまれるもので、液体

を入れたと考えられる。直径は数種類あるが、この類には井桁に「長」の字の焼印をもつものが目立つ（図125）。

19世紀中葉を除いては出土量が少ないことから、時期的な変化は検討できる段階にないが、19世紀中葉には多種多様なものが使用されていたといえ、特に今後焼印の検討などもあわせ行うこと、内容物との対応関係なども明らかにしていけると考えられる。

#### 《引用・参考文献》

- 仙台市教育委員会 1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集  
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1992 『東北大学埋蔵文化財調査年報』4・5  
東北大学埋蔵文化財調査委員会 1993 『東北大学埋蔵文化財調査年報』6  
東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 『東北大学埋蔵文化財調査年報』8